

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる』		○網野学園経営会議や全体研修会の参加報告等を通し、学園で育成したい非認知能力について職員間で共有した。また授業研究会に参加し、小中学校の教職員と意見交流をしたことで園での教育・保育を言語化や明文化する等、実践に向けた取組を定着させることができた。	・改めて遊びの中の学びや非認知能力の育成について、網野学園での取組や研修等を踏まえ共有し、実践や検証をしている。また、アプローチプログラムを指導計画に反映させながら、架け橋期の充実を図るとともに、さらに小学校との連携を密にしていく。
(あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成		△園では温かい雰囲気づくりや一人一人に応じた配慮を心掛けてはいるものの、生活習慣においては、それぞれの家庭で認識の差があった。また、家庭の事情や保護者の多様性を理解し、対応する難しさも感じた。	・乳幼児教育・保育の中で意識したいSDG sの項目を選定したり、捉え方を見直したりして、職員自ら進んで取り組むような環境づくりをする。
<テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』		○保育者が遊びや行事を見通し、園児が自己決定をしたり、やり切ろうとしたりする雰囲気をもつ等、環境の工夫が園児の主体的な遊びの充実につながった。	・園児一人一人を丁寧に見取り、子育て支援や家庭支援を重視しながらウェルビーイングを探り、高めていく。
		△教育・保育における人権意識の大切さを重視しているが、関わり方や捉え方は職員の意識の差にも係わるので、機会を捉えて研修をしていく必要がある。	・危機管理の徹底を図るとともに、心身共に豊かな遊びや生活が展開できるよう努める。
		○教育・保育内容や園児理解、支援策について等、ベクトルを合わせて実践できるようOJTを重視し、職員同士のやり取りの活性化を図ることができた。	・職員一人一人が人権意識を基盤に探究心をもつとともに、主体的に同僚性やOJTを生かしながら、質の高い教育・保育につなげていけるよう職員同士をつないでいく。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
保幼小中 一貫教育 の推進 (保幼小 接続)	・「網野学園」の教育目標をもとに、目指す子ども像や基本方針を念頭におき、園での教育・保育を進める。 ・園児と児童の交流の機会や相互理解を深めながら、互恵性のある取組を進める。	・網野学園で研究する第2期『未来を拓く学校づくり』の取組を確認したり深めたりしながら、教育・保育の中で育む非認知能力と認知能力の相関性について探っていく。 ・園児と児童の交流の機会や内容を見直し、『架け橋期』を意識した連携の在り方を共有し、実践する。	○京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で公開保育をするにあたり、子どもの姿から、非認知能力と認知能力を丁寧に捉え直したり、職員間で共有したりすることができた。関連するところはあるが、就学前では、非認知の部分（土台）を積み上げていくことの大切さを確認し合った。 △小学校からのアプローチによって交流が密になり、連携の強化にはつながったものの、『架け橋期』に関しては踏み入れることができなかった。今後、学園の中で架け橋プログラムを作成していきたい。

教育課程	・『包み込まれているという感覚』を基盤に、園児の安心や安定的保障をしながら、心豊かに園生活が楽しめるようにする。 ・探究的な遊びが展開できるよう、環境や援助の工夫をする。 ・遊びと非認知能力の相関性について、指導計画に反映させながら実践を重ねる。	・多様性を踏まえながら園児や家庭に適切な支援が提供できるよう、園内で作成した『こころの育ち指標図』をもとに、全職員の連携を強化し、実践する。 ・探究心を高めながら遊びを展開していくことができるよう、園児の興味や関心を丁寧に見取り、保育者も共に心揺さぶられる遊びや活動を共有する。 ・RV-PDCA を充実させながら、マネジメント効果を実践に生かせるようにする。	○園児一人一人を丁寧に見取り、個別最適こそがウェルビーイングにつながることを園内で共有した。園内研修には欠かさず『心の育ち指標図』をもとに話し合い、実践につなげていった。 ○「なぜ」「もっと」等の言葉や思いを遊びの中で価値付けをして、園児と保育者が共主体となって広めたり深めたりしながら進めることができた。 △保育者の資質やそれぞれの保育の在り方を助長するような指導には至らなかった。
子育て支援	・網野学園の取組を啓発しながら、家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立と定着を目指す。 ・園開放や園庭開放日を設け、親子で楽しさを共有できる場の提供をする。	・網野学園リーフレットを活用したり、『網野学園家庭学習頑張り週間』の取組意義を伝えたりしながら、基礎基本の定着が学習基盤になることを啓発する。 ・親子や保護者同士が交流できる場を通して、こども園での様子を知ったり、子育て情報を交流したりすることができるようにする。	○『網野学園家庭学習がんばり週間』の定着に加え、京都ノートルダム女子大学の高井特任教授による『子育て講演会』や、『学びスタート調査結果』等、直接的または間接的にも子育て支援に係わる取組を充実させた。 △園庭開放は好評だったものの、園開放への参加が少なく、保護者同士の情報交流の場にはなりにくかった。網野地域子育て支援センターが拠点となっていると感じる。
(A) 研修(教員の資質向上・人権教育)	・非認知能力の育成や特別支援教育等を軸にした園内研修を進め、全職員の資質と人権意識の向上を目指す。	・遊びと非認知能力の育成について可視化しながら同僚性やOJTを活用しながら、職員の人材育成につなげていく。 ・園児一人一人を丁寧に見取り、人権意識をもちながら適切な教育・保育にあたるための園内研修を充実させる。	○ギミックブラッシュアップシートの共通理解と保育構想シートを作成し共有したことは、専門性を高めるための大きな成果となった。全担任がメインとなる園内研修を行うことで、同僚性やOJTにつながる意義のある学びとなった。 ○人権意識を持続するため、学期ごとに全職員がチェックシートを活用し、振り返りを行った。また園児や保育実践に対して忌憚のないやり取りができる職員関係が、適切な教育・保育に結び付いた。
次年度に向けた改善の方向性	・既存のアプローチプログラムを参考にしながらさらに、5歳児と1年生との学びをつなぐ『架け橋プログラム』を作成し、架け橋期の充実を図る。 ・網野学園の新たな教育目標や目指す子ども像、経営方針等を職員はもとより保護者にも周知し、自園の教育・保育計画に反映させるとともに、RV-PDCAを生かし、さらに質の高い教育・保育を目指す。		